

## 越前大野城下における土地管理と景観

### ——「渡り地浮地絵図」の考察から——

渡 邊 秀 一

#### 〔抄 録〕

「渡り地浮地絵図」の記載内容を理解するためには、地方の役人がなぜ大野城内の一角を含めて絵図を作成することができたのか、あるいはなぜそのような絵図が必要であったのかを解明することが必要である。武家屋敷地の二種の記号は、一つは侍屋敷地を示し、他方は下級藩士および足軽・中間の屋敷地を示すものであった。一方、地方役人は、浮地・渡り地の測量や分割等の作業を行っているが、その活動の範囲は郭外だけでなく、郭内の一角にも及んでいる。そして、それは二種の記号が使われた武家屋敷地をも含み、当該絵図が記載する範囲と一致している。このことは、絵図に記載された武家屋敷地も渡り地の範疇に含まれるということである。

また、武家屋敷地における地方役人の活動が可能であったのは、そこがもともと村地であり、地方役人が管理・掌握しておくべき土地であったためである。村地の武家屋敷化は近世初期の出来事であろう。しかし、当該絵図で特徴的なことは、それを過去としてではなく、現在のこととして記録していることである。ここに、武家屋敷地・御用地と田畑（渡り理・浮地）の相互的可変性ととも、城下町景観の時間性にかかわる問題が潜んでいる。

**キーワード** 近世城下町、越前大野、城下町景観、土地管理、渡り地浮地絵図

#### はじめに

筆者は、大野市歴史民俗資料館に寄託された斎藤寿々子家文書中の絵図群を中心に、大野城下関係絵図の分析を通して近世中期における大野城下の変容を追ってきた<sup>(1)</sup>。前稿において取り上げた享保8（1723）年「渡り地浮地絵図」も斎藤寿々子家文書のなかの絵図である<sup>(2)</sup>。「渡り地浮地絵図」は浮地をなす田畑の掌握を目的としつつ、町絵図的性格の強い絵図であると理解されてきた<sup>(3)</sup>。こうした理解に至ったのは、第一に絵図中の大野城下周辺に広がる田畑が浮地と理解されたこと、第二に当該絵図が大野城、武家屋敷地、町人地、寺地など大野城

下を構成する要素がもれなく記載された城下町絵図で、なかでも町人地の記載内容が享保15（1730）年の「大野町絵図」にきわめて近いものであることによる。しかし、越前大野城下における「浮地」の意味は未検討のまま残され、かつ図題にある「渡り地」についてはまったく言及されてこなかった。そこで、「渡り地浮地絵図」に記載内容とその意味を理解するための前提作業として、絵図の記載内容および地方文書の記載内容を照らし合わせ、越前大野城下における浮地・渡り地の意味を明らかにすることが前稿の目的であった。

前稿における検討結果に基づけば、浮地をなす田畑の掌握を作成目的とするという点には根本的な修正が必要である。すなわち、「渡り地浮地絵図」に描かれた大野城下周辺の田畑には確かに浮地の記載が認められるもののその区画数は少数で、田畑のほとんどが渡り地であった。しかも、渡り地には、田畑はもちろん、武家屋敷地やその他の用途をもつ御用地などが含まれ、寺地や武家屋敷地、御用地から浮地になるケースも確認され、浮地と渡り地は表と裏のような一体的な関係にあった。したがって、「渡り地浮地絵図」の作成目的は浮地の管理・掌握のみならず、渡り地の掌握もその目的の中に入っていたと言わなければならない。

以上の結果、「渡り地浮地絵図」を理解する上で残された問題は、城下町絵図のあるいは町絵図的といわれる当該絵図の特性である。本稿では「渡り地浮地絵図」における武家屋敷地・寺地・町人地の記載内容を検討し、近世城下町大野の景観を考える上で渡り地・浮地がいかなる意味をもっているのかを考えてみたい。

## 1. 渡り地浮地絵図における記号表現

### （1）記号の種類

絵図と呼ばれるものの多くは絵画的な記号と図形的な記号とで表現されている。とくに都市絵図と呼ばれる範疇においてその傾向が強い。渡り地浮地絵図における大野城下もこの二つの表現方法を併用している。絵画的記号は山川寺社などを景観的に描き出すが、渡り地浮地絵図では、彩色はあるものの、鳥瞰図的な立体感はなく、景観的表現が希薄である。一方、当該絵図で用いられている記号は絵記号（家型）と□・△などの図形的記号の二種である。家型の絵記号は主に武家屋敷地で用いられたものであり（図1）、図形的記号は主に町屋地区で多用されたものである。

家型の絵記号には三種類がある（図2、①～③）。①は柳町南部や水落・鷹匠町などに記載されたもので、81ヶ所にある。大野城郭内の柳町に記載されている点から、これが侍屋敷地を示すことは間違いない。また、侍屋敷地の家型記号はこの一種類だけで、記号の大きさに大きな違いは見られない。これに対して②および③は寺町と各町に分布する寺地（寺院）として描かれた家型記号で、合わせて33ヶ所に記載されている。①と②・③はよく似た記号であるが、武家屋敷地の家型記号は隅柱などが一本線で描かれているのに対して、②・③は隅柱に二

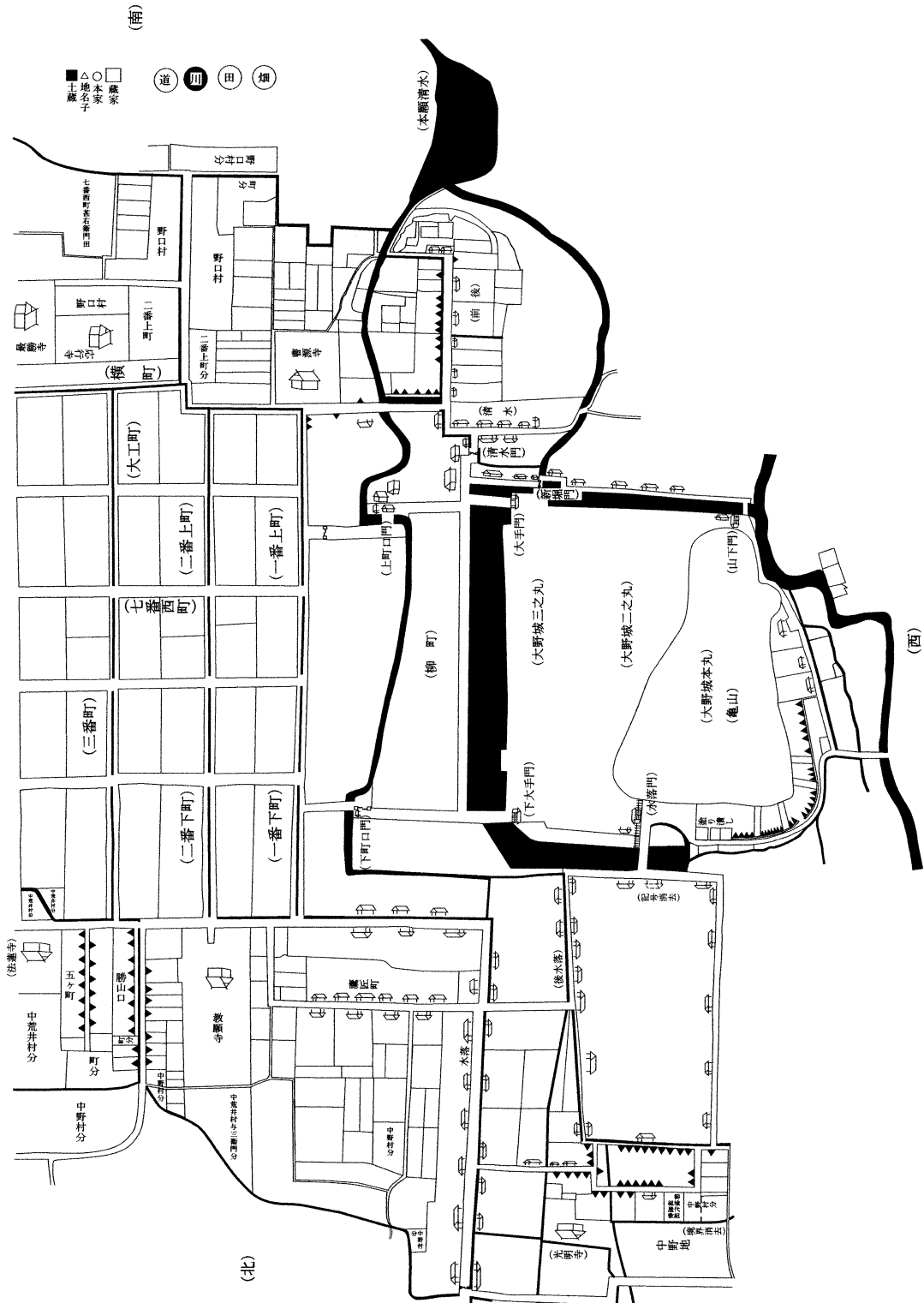


図1 渡り地浮地絵図に描かれた武家屋敷地 (トレース図)

注1 原図の記載内容のうち、周辺部で一部省略した部分がある。

注2 トレース図中の( )内は筆者が補った。

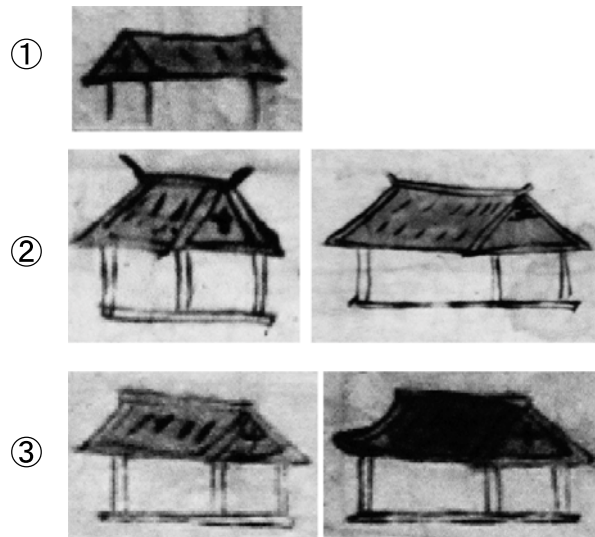


図2 「渡り地浮地絵図」の家型記号

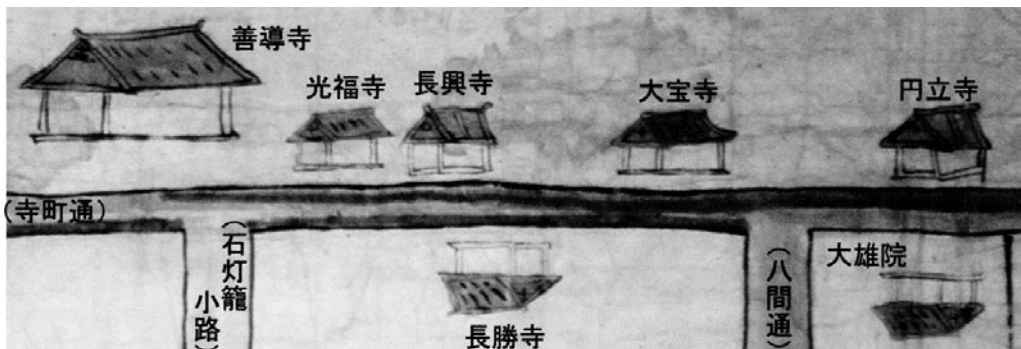


図3 「渡り地浮地絵図」における寺院描写（寺町）

重線が用いられている点で共通している。ただ、②は③に比べて屋根の鬼瓦を強調する描き方になっている。また、寺町通り北部の寺院群を示した図3を見てわかるとおり、光福寺・長興寺などと比べて善導寺がきわめて大きく描かれ、記号の大きさに著しい差がある。鬼瓦の強調の有無、絵記号の大小の違いは、地子免除された寺地の大きさや年貢地を含めた寺地の大きさとは関係がない。そのため、これらの記号の違いがもつ意味については現時点では明らかではない。

一方、図形的記号は□・■・○・△・▲の5種類が用いられている。このうち、凡例に記載されているものは▲を除く4種類で、町屋地区において用いられた記号である。凡例によれば、□は蔵家、■は土蔵、○は本家、△は地名子である。このほか、上記の記号を組み合わせた記号（㊦）も見られる。「渡り地浮地絵図」で言う本家とは、自分自身の土地に自分自身で建て

た家屋を指している。これに対して、地名子とは借地に自分の家を建てたものである。また、□や△はあっても◎はないことから、□（蔵屋）にも○と同様に本家の意味が含まれていると考えられる。したがって、「渡り地浮地絵図」には、土地の所有関係から本家（□・○）と地名子（△）とが区別がされ、本家が家屋の構造的的特色から□（蔵屋）と○が区別されていたことになる。「渡り地浮地絵図」では○（本家）の構造的的特色は不明であるが、「渡り地浮地絵図」の図形的記号と共通する記号を用いた享保15（1730）年「大野町絵図」では、○は葛屋（草葺き家屋）である<sup>(4)</sup>。この他に□（蔵屋）が両絵図にあることから、「渡り地浮地絵図」の○は、本家かつ葛屋の意味であると理解でき、さらに△は地名子で蔵家の意味であると考えて間違いない。「渡り地浮地絵図」と「大野町絵図」はほぼ同じ図形的記号を使用しながら、「大野町絵図」が家屋の構造的的特色を優先した表記になっているのに対して、「渡り地浮地絵図」が土地・家屋の所有・貸借を優先した表記になっているのは、浮地・渡り地の把握、浮地の管理を任とする浮地庄屋の職務を反映したものであろう。

## （2）武家屋敷地の図形記号

「渡り地浮地絵図」の図形的記号は□・■・○・△が町屋敷地区だけで用いられた記号であるのに対して、▲は武家屋敷地区と町屋敷地区にまたがって使用されている。その数は107個に上るが、町屋敷地区に記載されたのは2個だけで、105個が武家屋敷地区である。図1を見てわかるとおり、この記号が集中する場所は五ヶ町、勝山口、前後、後山、そして大野城北部に位置して土井家時代に城代組、郡組と呼ばれた地区の計6ヶ所である。このうち前後は、本来は侍屋敷が建ち並ぶ地域である。そのため前後を除く5か所が足軽が多く居住する地区であり、▲も足軽屋敷地を指し示すものと理解されてきた。しかし、正保元（1644）年から大野を治めてきた松平家が天和2（1682）年に明石へ移封となった際の記録「松平家壬戌得替記」<sup>(5)</sup>によれば、▲を足軽屋敷地と安易に断定することができない。大野の武家屋敷に関する「松平家壬戌得替記」の記述は以下の通りである。

一、侍屋敷百十六軒、内二曲輪十軒外曲輪百六軒。

一、歩行者已下大形町屋敷（「或」 欠か…筆者）は近所之在郷に住宅仕候に付、家数多無御座候。足軽屋敷五ヶ所、中間長屋三ヶ所是亦町在郷に住宅仕候に付、家屋敷少に御座候。

「松平家壬戌得替記」の武家屋敷に関する記述は、侍屋敷とそれ以外の屋敷地に区別があった二条の文となり、二条目の文では歩行以下と足軽屋敷・中間とが区別されている。このことは、歩行以下と表現された家臣団が足軽や中間ではないことを示している。歩行者とは、一般的に徒士と呼ばれる下級藩士である。この記述はあくまでも天和2年の武家屋敷に関するもので、「渡り地浮地絵図」が作成された享保8（1723）年とは40年余りの時間的な隔りがあるが、家臣団の一部が町屋敷や近在に居住し、足軽屋敷が5ヶ所であったという記述は、「渡り地浮地絵図」の▲の分布と一致している（図1）。したがって、「渡り地浮地絵図」の▲に徒士

のような下級藩士の屋敷地が含まれていた可能性を否定できないのである。

武家屋敷地を示す家型の絵記号と図形的記号▲は町屋敷地においても少数ながら用いられている。町屋敷地に記載された家型絵記号は、寺院を除けば、三つである。一番上町の1例は不明であるが、一番上町西街区の家型絵記号は町蔵である。町蔵は土井家の大野入封の翌年、天和3（1683）年に1石4斗6升5合の土地が地子免除になっている<sup>(6)</sup>。また、二番上町西街区のそれは医師長岡柳宅恭性の屋敷地である。長岡柳宅恭性は藩から金15両5人扶持の禄を受けていた<sup>(7)</sup>。

▲記号は一番上町西街区東端の2区画に記載されている。これについては別稿でも触れたが<sup>(8)</sup>、あらためて史料を示して確認しておきたい。宝暦13（1763）年「一番上町屋鋪高水帳」（寛政9年の写し）<sup>(9)</sup>の西街区東端2区画分に以下のような記載がある。

松尾三郎平跡

一高五斗八升七合

竹内茂兵衛

橋本左衛門跡

一高五斗八升七合

安川藤七

また、弘化4（1847）年「午御物成皆済目録」<sup>(10)</sup>の引高のなかに以下のような記述がある。

六斗七升七合式勺

未より壺番上町御家人屋敷替地ニ付御取上

此高壺石壺斗七升四合 高より五ツ六分本口共

皆済目録にいう「未」とは安永4（1775）年で、同年4月8日に野口村を火元とする火災で大野城三之丸をはじめ、武家屋敷地区および町屋地区のほとんどを焼失した年である。「御家人屋敷替地ニ付御取上」とはこの安永4年の大火後に藩士の屋敷替えがあり、町屋敷地が武家屋敷地として収公されたことを示している。しかし、「一番上町屋鋪高水帳」にその記載があるだけでなく、渡り地浮地御絵図に▲記号がつけられている点から、町屋敷地を武家屋敷地として使用することは少なくとも享保8（1723）年にまでさかのぼることができる。また、高水帳の2区画を合わせた屋敷高が「午御物成皆済目録」と一致しており、一番上町で東端の2区画以外に武家屋敷地に利用された記録がないため、二つの記録は同じ区画について記載したものである。

「一番上町屋鋪高水帳」に記載された竹内茂兵衛は宝暦7（1757）年に坊主として出仕を始めた人物で、禄は金四両三人扶持<sup>(11)</sup>、安川藤七は郡奉行組代官手代を務め、禄は米拾三俵一斗二人扶持あった<sup>(12)</sup>。また、前住者として記載された2名のうち橋本左衛門は確認できないが、竹内茂兵衛の先住者・松尾三郎平は郡奉行手代を務めた人物で、寛保4（1744）年に没している。禄は竹内茂兵衛と同じ金四両三人扶持であった<sup>(13)</sup>。竹内茂兵衛・安川藤七・松尾三郎平はいずれも足軽ではなく、下級藩士である。「午御物成皆済目録」が「御家人屋敷」と記載したのもそのためであろう。以上のことから、▲記号は、足軽だけでなく、下級藩士をも含んだ屋敷地であったと考えるほうが妥当である。

## 2. 武家屋敷地の広がりと渡り地の発生

### (1) 17世紀後半の武家屋敷地

前章において渡り地浮地絵図で用いられた記号の意味が明らかになったが、同時に土井家時代の下級藩士・足軽・中間の屋敷地が町屋敷・近在に分布していた点は、「松平家壬戌得替記」に記録された松平家時代から変化していなかったことも確認できた。その「松平家壬戌得替記」によれば、侍屋敷は二之曲輪に10軒、外曲輪に106軒があった。延宝7（1679）年の「大野城石垣并長屋門破損之覚書」<sup>(14)</sup>に基づいて作成した図4によれば、松平家時代の大野城は亀山の天守とその東麓の居館を含む一郭を本丸とし、上・下大手門内を二之丸、濠外に外丸が配されていた。延宝7（1679）年の絵図は「松平家壬戌得替記」と同時期のものであり、「松平家壬戌得替記」に記述された「二曲輪」とは延宝7（1679）年の図の上・下大手門内の本丸南北に広がる屋敷地であることは間違いない。

本丸・二之丸という順序からいえば、外曲輪とは図4の外丸に該当すると考えるのが当然であろう。しかし、二之丸の屋敷数が10軒であることと外丸の大きさから考えれば、外丸に106軒の侍屋敷を配置することは困難である。土井家のもとで外丸と呼ばれていた曲輪は松平家時代の二之丸で、松平家のもとで外丸と呼ばれていた一角は柳町と呼ばれていた<sup>(15)</sup>。また、文

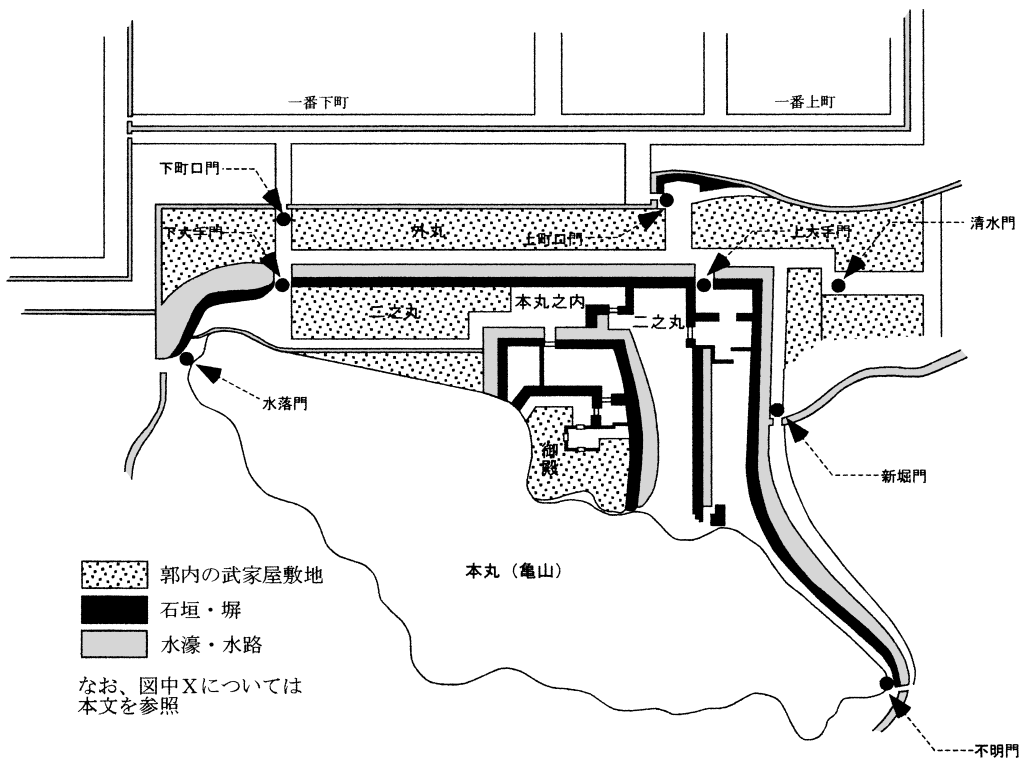


図4 延宝7年の大野城郭内（「大野城石垣 長屋門破損之覚書」より）

化7年の城郭絵図になると外丸を外曲輪と記載しているが、それが旧二之丸であることに変わりはない<sup>(16)</sup>。例えば、土井家の入封から間もない貞享5（1688）年の「越前国大野城破損修復願絵図」<sup>(17)</sup>は亀山を本丸、東麓の御殿のある郭を二之丸、その東側を三之丸、外丸と記載している。元禄8年、宝永8年の城郭絵図でも大野城の曲輪名は全く同じである。したがって、「松平家壬戌得替記」にいう外曲輪とは、松平家時代の外丸でもなければ、土井家時代の外丸あるいは外曲輪でもないことになる。

17世紀中期から18世紀前半にかけての越前大野の武家屋敷地の広がりを示したものは、現時点では『諸国当城之図』に収められた「大野図」（仮称）、尊経閣文庫『諸国居城図』に収められた「越前大野図」（仮称）の二点以外に見当たらない<sup>(18)</sup>。図5は記載内容がより具体的で詳細な「大野図」に基づいて武家屋敷地の分布を示したものである。「大野城図」は城外北部の武家屋敷地および道路の描写が大きくゆがんでいるほか、不完全な描写がいくつか見られる。図5中の①は「大野図」では「土」と記載され、武家屋敷となっている。しかし、同時に寺院と同じ彩色が施されている。渡り地浮地絵図では、そこは応行寺・最勝寺がある。したがって、①は誤記である可能性がある。また、②・③は細かな区画が記載されているが、そこが武家屋

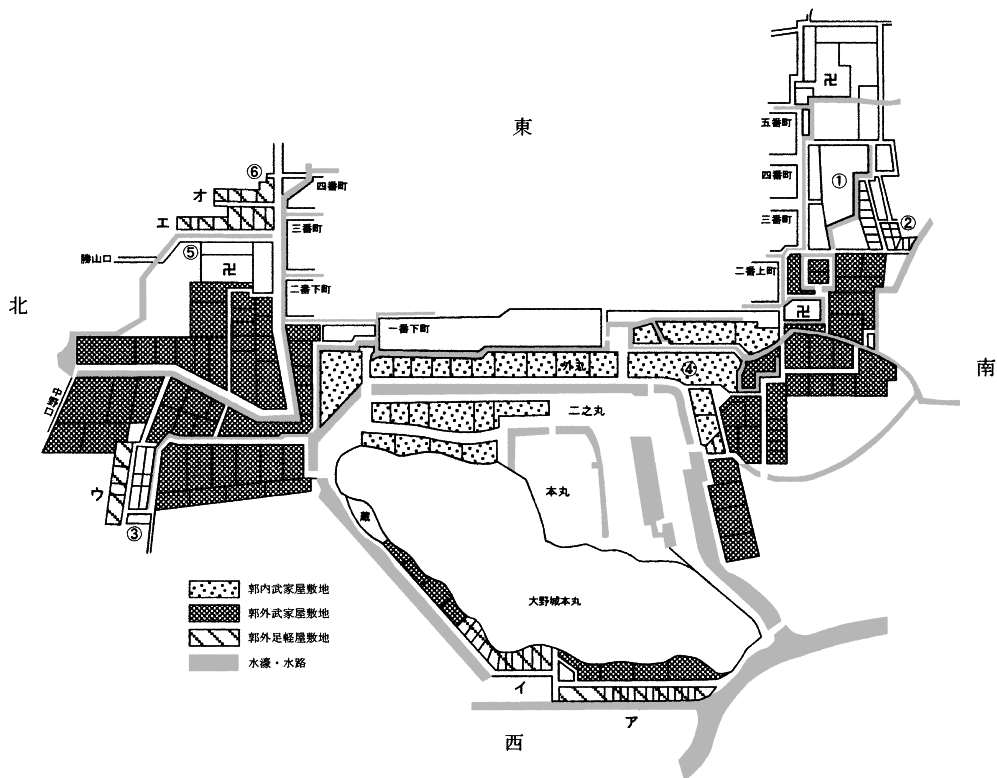


図5 『諸国当城之図』所収「大野城図」の武家屋敷地（「越前大野」（原田伴彦・矢守一彦編（1982）『諸国当城之図』新人物往来社）より作成）

注 図中番号①～⑤については、本文参照。



敷・足軽屋敷、あるいはそれ以外のいずれであるかは記載がなく、勝山口の武家屋敷（足軽屋敷）に当たる④および⑤の西街区には、逆に区画線が入っていない。さらに、⑥は足軽屋敷の五ヶ町の東側で、法蓮寺の境内地に相当しているが、法蓮寺は記載されていない。このように『諸国当城之図』の「大野図」にはいくつかの問題点がある。しかし、大野城内郭の描写は図1と大きな違いは見られず、町人地・寺町の描写（図4では省略）を含めて、大野城下の概略を比較的良好に描写している。また、図1と比べても、武家屋敷地の広がりには大きな矛盾はない。そのため、17世紀後半の大野城下の屋敷地の広がりを概観するには十分であろう。

「大野図」に記載された武家屋敷（武士）の区画数は、郭内29（内、三之丸10、外丸19）、郭外北部44、郭外南部29、郭外西部（後山）8の計110区画である。三之丸の区画数が「松平家壬戌得替記」の記載と一致するほか、郭外の区画数は81であるが、区画が記載されていないブロックがあることを考慮すれば、「外曲輪百六軒」にきわめて近いものになろう。したがって、「松平家壬戌得替記」にいう外曲輪とは上大手門・下大手門・水落門・不明門の外側に広がる武家屋敷地を指していたと考えて間違いない。

## （2）渡り地の発生

前節までの検討を通して、「大野図」に描かれた大野城の形状と内部の構成、外曲輪の侍屋敷数、足軽屋敷数が「松平家壬戌得替記」の記述と一致する点が多く、「大野図」を17世紀後半の松平家の時期の大野城下を描いたものとみなして大過ないことが明らかになった。この「大野図」と渡り地浮地絵図における武家屋敷地の分布や武家屋敷地の区画を検討することにより、17世紀後半から18世紀前半にかけての武家屋敷地の変化を明らかにすることができる。延享4（1747）年の「大野屋敷割帳」<sup>(19)</sup>によれば、土井家時代の大野城三之丸の屋敷数は11であり、松平家時代と大きな変化はない。したがって、「松平家壬戌得替記」にいう外曲輪が検討の対象となる。この外曲輪は主に大野城の南北に広がっているため、以下では郭外北部・郭外南部に分けてみていく。

図6は「大野図」と渡り地浮地絵図の郭外（外曲輪）北部の武家屋敷地を比較したものである。「大野図」では図の逆L型に通り抜ける中央の道路が大きく歪んでいるが、それ以外の歪みは小さく、比較は可能である。「大野城図」と渡り地浮地絵図を比べてまず気付くことは鷹匠町東部において屋敷地であった区画（図6、①・②）が渡り地（畑）になっていることである。この点は③も同じである。「大野城図」では③のブロックには区画線はないが、渡り地浮地絵図では3区画に分割され、渡り地（畑）となっている。「大野城図」の④は屋敷として記載されているが、渡り地浮地絵図には侍屋敷も徒歩以下に屋敷地御記号もなく、渡り地にもなっていない。したがって、村地になっていたものと考えられる。

一方、図7は「大野図」と渡り地浮地絵図の郭外（外曲輪）南部の武家屋敷地を示したものである。図6と同様にここでも武家屋敷地から渡り地へ変わった場所を幾つか確認できる。そ

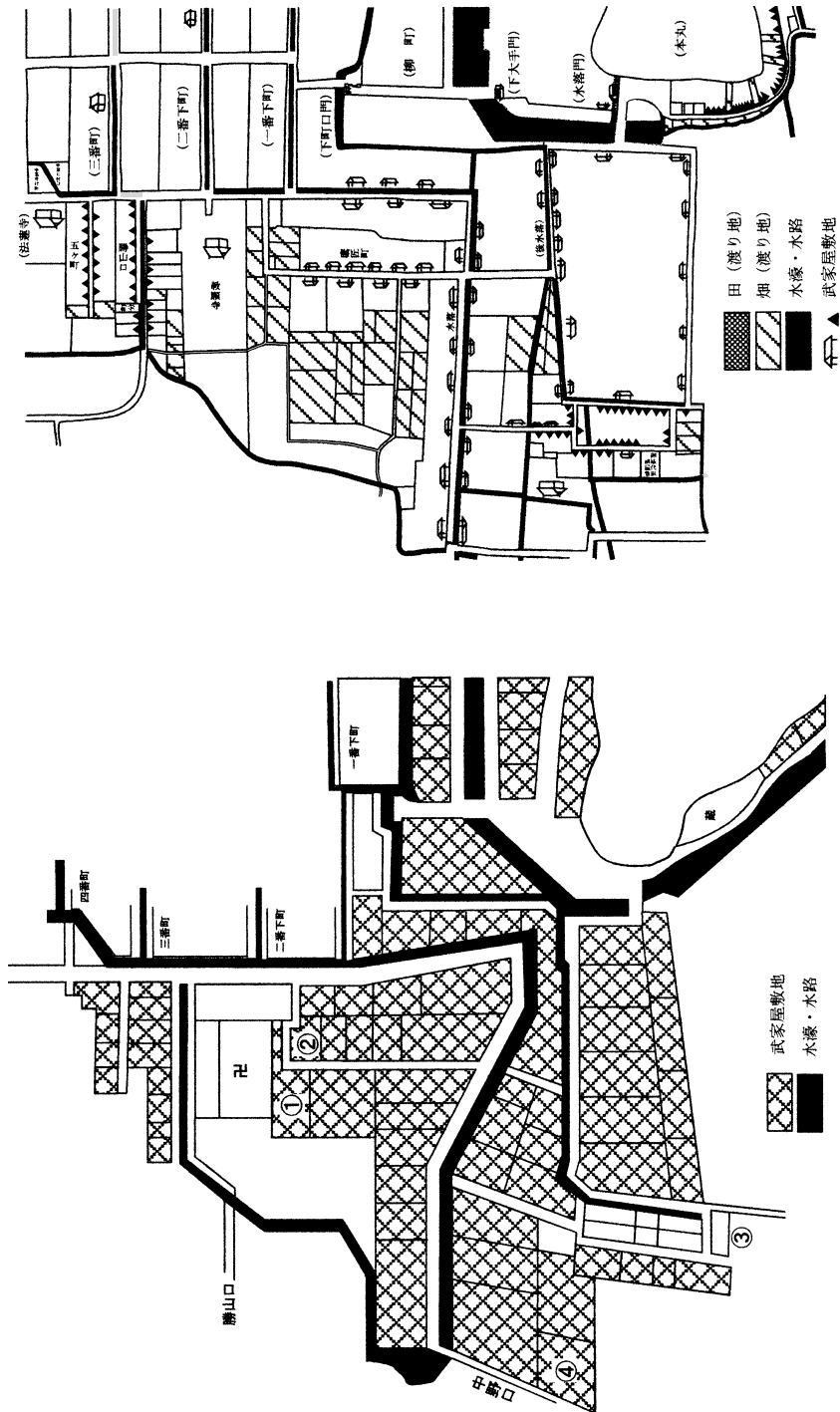


図 6 武家屋敷地区の土地利用変化（郭外北部）

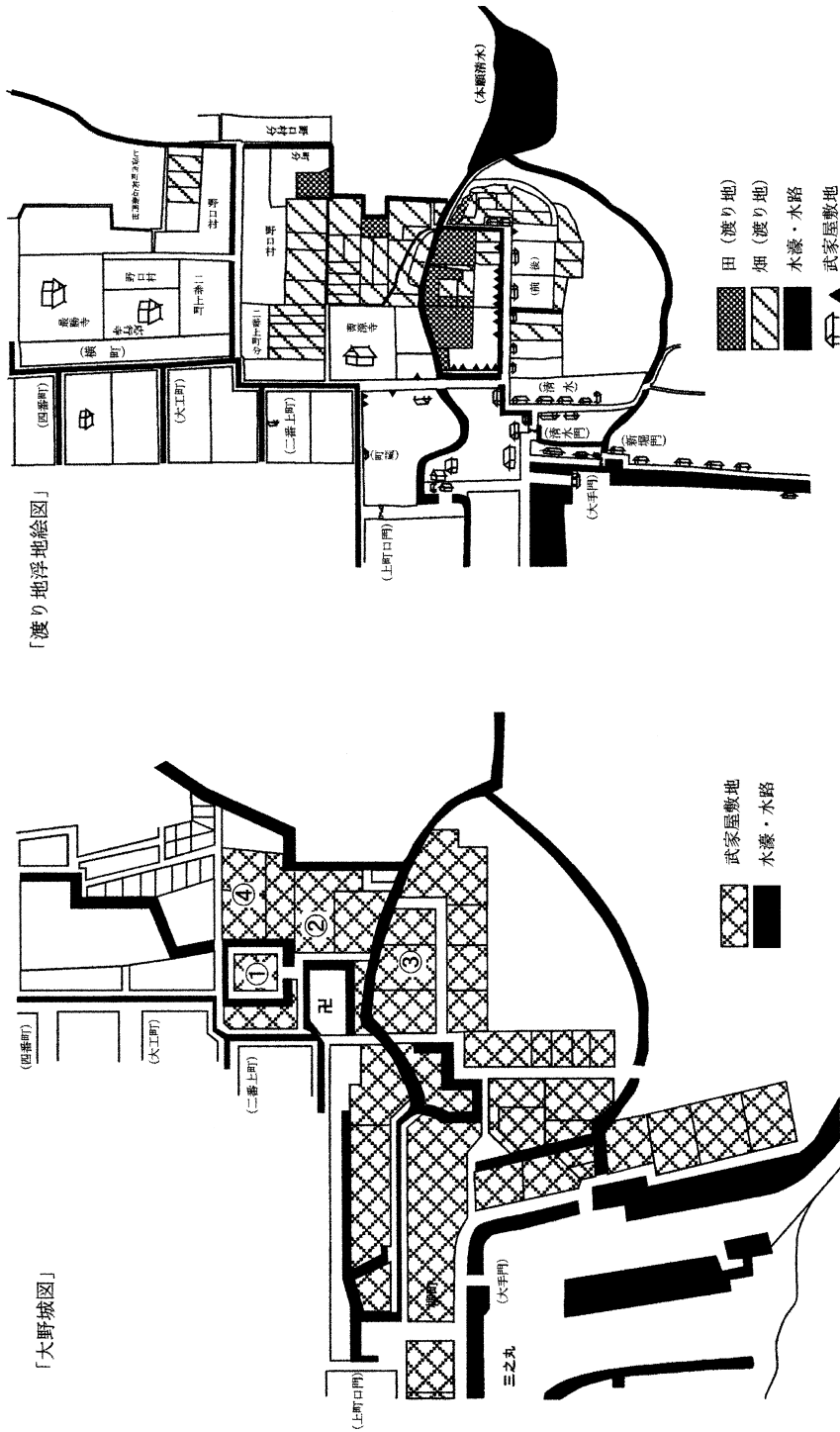


図7 武家屋敷地区の土地利用変化 (郭外南部)

れが図7の①・②である。とくに、②は曹源寺後と表記され、浮地・渡り地の所在地としてしばしば地方御用留に記載された場所である。図7の③のブロックには「大野図」では西を表とする侍屋敷が3区画ある。これに対して、渡り地浮地絵図では同じブロックに西を表にした下級藩士あるいは足軽・中間屋敷地が9、渡り地が2区画描かれている。しかし、それらの背後に引かれた東西方向の区画線を見る限りでは、本来は3区画であったことが読みとれる。したがって、17世紀後半の時点では侍屋敷地であった場所が18世紀前半には下級藩士あるいは足軽・中間屋敷地に変わったと考えることができる<sup>(20)</sup>。近世城下町の武家屋敷地は、一般的に武士の階層によって屋敷地の面積が変化する。③のブロックの屋敷地の背後に渡し地が存在するのは、当該ブロックの居住階層が低下して屋敷地が狭くなり、屋敷地として条件が悪い水路沿いが渡り地（田・畑）になったためと考えられる。また、④は「大野城図」では侍屋敷地であったが、渡り地浮地絵図では枝村の野口村分になっている。図6の④と同じケースである。

以上の検討から明らかになることは、松平家時代の武家屋敷地を土井家が継承し、土井家のもとで使用されることのなかった屋敷地が浮地または渡り地になり、また居住者の階層が低下して屋敷地面積が減少した結果として浮地あるいは渡り地（田畑）が発生しているということである。実際、延享4（1747）年時点での大野における侍屋敷数は大野城三之丸の屋敷地11区画を含めて105区画で、外曲輪に限ってみれば松平家時代より12区画少ない94区画である。また、前稿でも述べたように、浮地・渡り地の発生は武家屋敷地に限ったものではなく<sup>(21)</sup>、寺地や武家屋敷地以外の用途で収公された御用地も含まれる。後者についてはその例を明らかにできないが、前者すなわち寺地については「曹源寺脇浮地別正院屋敷」<sup>(22)</sup>等のかつて寺地であったことをうかがわせる小名も見られる。したがって、渡り地浮地絵図における渡り地・浮地は松平家から受け継いだ武家屋敷地、収公された寺地、御用地のうち、土井家時代に未利用のまま残された土地であったと考えることができるのである。

### 3. 浮地・渡り地の土地管理

土井家が松平家から受け継いだ御用地・武家屋敷地の規模については、二つの記録に手がかりが残されている。その一つが天和3（1683）年の「町惣高書上之写」（宮澤秀和家文書）<sup>(23)</sup>であり、他の一つが宝暦11（1761）年の「御領分諸色役割高牒」である。「町惣高書上之写」によると、大野町の惣高は5176石6斗9升1合で、出分を除く本高は5087石8斗7升3合であった。ここから枝郷5ヶ村分、他村への越石分等を除いた町分は4463石7斗3升である。その町分に関して以下のような記載がある。

一、同三百四拾六石貳升老合六勺 前々々御侍家敷土井堀ニ引ル ……………①

又右之内訳

一、高貳百八拾五石六斗貳升老合貳勺 前々々引高 ……………②

	町年寄	
一、同壺石五斗四升三合四勺	庄兵衛……………	③
是ハ町年寄仕候ニ付御年貢御免被成候		
	同断	
一、同壺石七斗六合	文六……………	④
同様		
	月行事	
一、高四斗壺升貳合	猪右衛門……………	⑤
是ハ月行事仕候ニ付御年貢御免被成候		
	同断	
一、同六斗	七兵衛……………	⑥
同様		
一、同貳石貳斗五升三合	藤右衛門……………	⑦
是ハ出羽守様御代々御証文御座候		
一、同貳石六斗九升六合	全徳……………	⑧
是ハ但馬守様御代々		
一、同壺石六斗貳升	正哲……………	⑨
右同断		
一、同壺石四斗六升	道忠……………	⑩
是ハ出羽守様御代々御証文御座候		
一、高三石貳斗	新七……………	⑪
是ハ但馬守様御証文御座候		
一、同壺石四斗六升七合	町藏屋敷……………	⑫
	御公儀様御	
亥年御奉行様迄願書指上申候得者町藏屋敷ニ被下候		
一、同壺斗八升八合	時鐘屋舗……………	⑬
	戊亥兩年ニ御侍屋敷町地子御免地	
勺		
一、同四拾三石七斗三升八合	三百四拾六石貳升壺合六勺引高之内 ……	⑭
	町高二入ル	

文書中の「出羽守」とは松平出羽守直政である。松平直政は結城秀康の子で、寛永元(1624)年に大野藩主になった。「但馬守」も同じく結城秀康の子で、正保元(1644)年に大野城主となった松平直良を指している。天和2年に土井利房が大野藩主になり、大野から明石に転封した松平直明は直良の子である。また、「戊亥兩年」とは大野に土井家が入った天和2(1682)年と翌3年を指している。

この記録によれば、①では侍屋敷地、土居・堀分として346石2升1合6勺が地子免除になっていたことになる。しかし、⑭では「御侍屋敷町地子御免地三百四拾六石貳升壹合六勺引高」とあり、その内訳は侍屋敷地と地子を免除された町人地である。その町人地の内訳を逐一列挙したものが③～⑭で、合わせると60石8斗7升6合2勺になる。そして、①から町地子御免地の合計高を差し引いたものが②の数値になるはずである。ただ、当該史料の記述に基づいて計算すると、②は285石1斗4升5合4勺になる。実際に記されている②の数値と4斗7升5合余りの誤差が生じている。弘化4（1847）年の「午御物成皆済目録」にも若干増加した285石8斗6升6合2勺が「前々より永引」として記録されていることから<sup>(24)</sup>、285石余りが実質的な「侍屋敷堀土井」の引高であったと考えて差し支えない。大野町では屋敷地は1反2石の石盛であるため、「侍屋敷土井堀」のために使われた大野町の土地は14町2反余りということになる。

一方、宝暦11（1761）年「御領分諸色役割高牒」<sup>(25)</sup> には、以下のような記載がある。

覚

一、本高 四万石

内

七拾五石	大庄屋耆人役引
百五拾石	郷与頭三人役引
百六石四斗六升八合八勺	鼻黒分之内
	御家中御屋鋪引
五拾石	西方大庄屋役引

ノ 三百八拾壹石四斗六升八合八勺

残高 三万九千六百拾八石五斗三升壹合貳勺

ここでいう鼻黒とは武家屋敷地の北西に隣接する中野村の一部である。その中野村にも106石余りの武家屋敷地があったのである。さらに、同史料には以下のような記述もある。

夫米高之訳

一、本高 四万石

内

五千八拾七石八斗七升三合 町

|

(中略)

|

百六石四斗六升八合八勺	鼻黒分
	御家中之御屋敷引

三百五拾四石八斗壹升貳合貳勺

右同人夫米諸役御免高

「御家中之御屋敷引」は前史料と同じであるが、その次に354石8斗余りの夫米諸役免除が記載されている点で、前史料とは異なっている。350石を超える引高は他村にはなく、引高としてもきわめて大きい。それがどのような理由による引高なのか記載はないが、大野城の城地であった可能性が高い。以上で、中野村の引高は家中屋敷引高と合わせると461石2斗8升1合になる。

天和2(1682)年「越前国大野丹生足羽郡郷村高帳」によると、大野町が5087石8斗7升3合、中野村が1487石5斗9升6合と記録されている<sup>(26)</sup>。大野町の石高は天和2年「町惣高書上之写」と一致しているが、享保16年「中野村年貢免状」(金森元貞家文書)に記された中野村の課税高は827石6斗4升1合3勺で<sup>(27)</sup>、中野村の表高との間に459石9斗5升7合4勺の差が生まれている。そして、この表高と課税高の差が先述した引高の合計はほぼ一致している。

こうした大野町および中野村鼻黒分の引高に関する史料から明らかになることは、①侍屋敷地の引高が「前々々」のもので、土井家が松平家の屋敷地をそのまま引き継いでいること、②引高になっているとはいえ、城地・屋敷地の高が地方分に明記されていることから、その土地が村地であると理解されていること、である。①は大野町について明記されたものであるが、これまでに検討してきたとおり、松平家時代の武家屋敷地が土井家にそのまま引き継がれたことはほぼ間違いない。したがって、「前々々」の記述はないが、中野村鼻黒分も大野町と同様であったと考えるべきであろう。そして、②は城地、武家屋敷地となった大野町・中野村鼻黒分の土地の管理と関わる事柄である。

そこで、改めて渡り地・浮地に関する史料を3例挙げておこう。

(i)「地方御用留」享和2(1802)年6月10日条<sup>(28)</sup>

一、新堀喜多山屋敷下現米出分地所之内、明和六丑年水荒引ニ相成、其後御用ニ而御取上ニ相成候地所有之候処、当時者空地ニ相成有之候。右之地所此度左之者依願被下候、尤浮地庄屋捌ニ相成候間、相改浮地庄屋へ相渡候様御奉行中被仰聞、則改相渡候、出役竹村彦右衛門・鈴木直治・笹嶋奎右衛門、立会御徒目付小山忠左衛門、棹打御足輕耆人、物持御中間耆人出ル、  
歩数・口米左之通

享和三亥改出 犬山村 与左衛門

一、田百五拾坪 此口米貳斗

外ニ貳斗九升追而相応之地面ニ相成候迄、当分御免。

(ii)「地方御用留」天保4(1833)年10月8日条<sup>(29)</sup>

一、水口甚次郎へ光明寺跡ニて屋敷被下候間、割渡候之様被仰付、今日此方三人、御徒目付鶴見伝内、竿打河合又八并御作事奉行木村小十郎殿出役割渡候、物持中間耆人断出

ル、浮地庄屋兩人罷出ル、  
南北九間 東西七間八丁  
此歩六十四坪屋敷渡  
外ニ拾坪式分 垣代道代引

(iii)「地方御用留」文化10（1813）年2月24日条<sup>(30)</sup>

一、御会所向御奉行土蔵有之候、西之方壱間南之方壱間囲込、寺田屋敷垣際迄歩数相改候  
様被仰付、則相改申候、

参拾四坪六分 横塀扣杭より式間四尺、長拾三間

ノ

右之内拾七坪五分 作物仕付有之

内

式坪三分 垣代ニ引 但長七間

幅式尺

残拾五坪式分

右之通書付横田権三郎殿江上ル

(i)の新堀喜多山屋敷は文化年間末の「越前国大野之図」によれば新堀沿い西端の屋敷である。また、(ii)は文政4（1821）年に焼失し仮堂であった中野村光明寺が文政5（1822）年に他所へ移転した跡地に関する記録である。光明寺は大野城の北、郭外武家屋敷地区に隣接していた寺院である（図1）。(i)では新堀喜多山屋敷西の浮地となった空地を改め、浮地庄屋に引き渡すよう指示を受け、そのように処置したということである。この浮地の改め、引き渡しに関わったのは、立会の徒士目付1人、棹打（竿打）の足軽1人、物持の中間1人のほか、竹村彦右衛門・鈴木直治・笹嶋杢右衛門と地方役人である。竹村以下の3人の藩士は「出役」とあるように大野藩地方勤の役人であり、当該の空地を改め、浮地庄屋に引き渡した主体は地方役人である。また、(ii)では浮地となった光明寺跡地を測量して屋敷地として割り、引き渡すことが行われている。この作業に参加したのは立会の徒士目付1人、棹打（竿打）の足軽1人、物持の中間1人、作事奉行1人、そして「此方三人」とあるように地方役人3人とすでに浮地であったためその管理を職掌としている浮地庄屋2人の、合わせて9人である。藩士の屋敷地の地割りの決定、屋敷地の引き渡しは作事方の任務である。作事奉行がこの作業に参加した理由は明らかではないが、作事方が関与していることには変わりはない。これに対して(iii)は地方役人による郭内の屋敷地の測量および土地の分割に関する記述である。本文にある「会所」とは上町口門をはいった北側に位置している（図8）。同図では「会所」がその向かいの南側にも記載されているが、この記述では「奉行」（奉行所か）となっている。また、同図では寺田屋敷は南側の「会所」に向かい合う位置にある。測量の対象になった場所は正確にはわからないが、南側の「会所」の区画の一角であったことは間違いない。



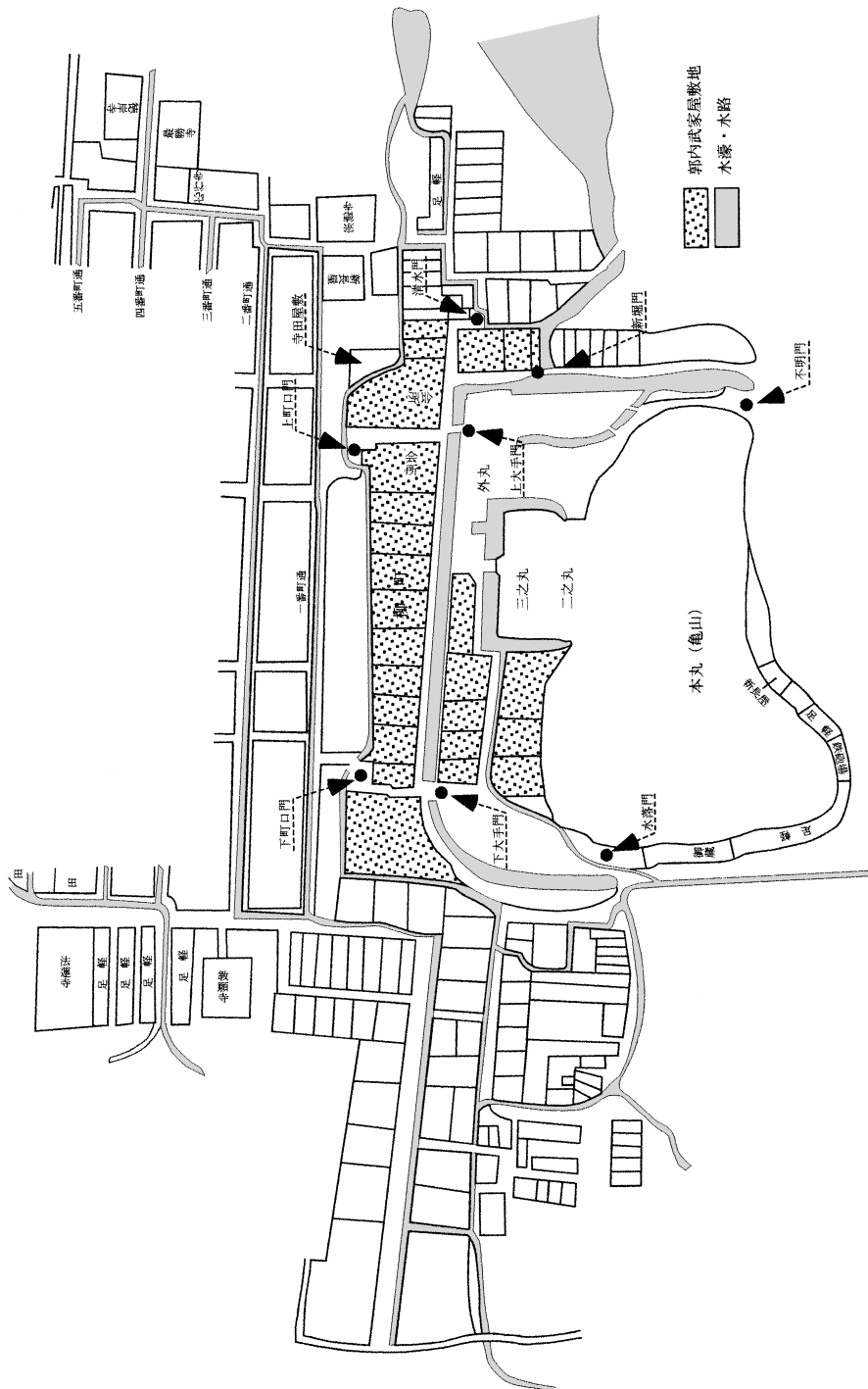


図8 文化年間末越前大野の武家屋敷地（「越前国大野之図」に基づいて作成）

こうした活動に加えて、地方役人は詳細な絵図を作成し、情報を蓄積していた。

(iv)「地方御用留」文政10（1827）年8月17日条<sup>(31)</sup>

一、曾源寺脇別正院屋敷畑三枚、此歩八拾五坪御用地に相成候間、改御作事方へ相渡候様被仰渡、尤浮地庄屋絵図面を以致案内、右絵図面ニ歩畝有之候ニ付、別ニ縄入不申、其俣ニ相渡候、

畑貳枚      三拾五坪      田一枚      三拾五坪      八拾五坪  
十五坪

浮地庄屋が用いた絵図がどれほどの範囲を記載していたのかは不明であるが、(iv)からはその絵図に対象地の位置や面積が記載されていたことがわかる。これとは別に、浮地になった土地の絵図作成に関する記事もあることから<sup>(32)</sup>、浮地庄屋の手元には幾枚かの絵図が存在したと考えられる。本稿で考察の対象とした「渡り地浮地絵図」も浮地庄屋の作成である。こうしたことから、浮地庄屋を含む地方の役人たちは日々の活動の記録とともに、絵図を作成し、浮地・渡り地の位置や面積、利用状態を常に掌握していたと思われる。

以上の結果、地方役人や浮地庄屋の活動範囲は、浮地・渡り地（田畑）のみならず、外曲輪の武家屋敷地はもちろん、大野城郭内に位置する柳町の一角にまで及んでいることが明らかになった。とくに武家屋敷地について言えば、その活動範囲は柳町の一部を含めて「渡り地浮地絵図」に記載された武家屋敷地の範囲と一致している。筆者は本稿の冒頭において、「渡り地浮地絵図」の作成目的は浮地や渡り地の管理・掌握であると述べたが、以上の点を踏まえれば渡り地には武家屋敷地も含まれ、利用状況を掌握すべき土地として認識されていたことは明らかである。なぜならば、その土地は課税対象から除かれてはいても村高に含まれ、「御侍家敷土井堀」あるいは「御家中御屋鋪」の用地として利用されている大野町・中野村の土地であったためである。そして、大野城内の主要部分に記号が一切なく空白になっていたことも、地方役人や浮地庄屋の関与が許されない土地であったためであると思われ、中野村の「夫米諸役御免」<sup>(33)</sup>の土地がこれに該当していると理解することができる。

#### 4. 「渡り地浮地絵図」と城下町景観—おわりにかえて—

歴史地理学においては、城下町絵図を城下町景観の復原資料として利用することが多い。「渡り地浮地絵図」の場合、大野城内の主要部分は全く記号がなく、いわば空白の状態になっている。しかし、そこが郭内であることから、武家屋敷地や越前大野藩の公的機関が建ち並ぶ地区であることが容易に推定できる。かつ、「渡り地浮地絵図」は越前大野城下の全体を描いているため、越前大野の城下町景観の全体像をとらえることは可能である。ただ、前稿で論じたように田畑（渡り地・浮地）と武家屋敷地・御用地とが相互的に可変的な関係にある。このことから、幾つかの問題点が生まれてくる。その一つは、景観的な可変性が高いために、「渡

「渡り地浮地絵図」に描かれた城下町景観は享保8年という一年あるいはそれ未満という時間的な幅の小さい「時の断面」<sup>(34)</sup>における景観として理解せざるを得なくなることである。仮に渡り地・浮地の中に屋敷地になった区画があったとしても、武家屋敷地の景観のごく限られた部分の変化であって、全体的な変化ではない、と言うことはできるであろう。しかし、原理的には享保8年時点における武家屋敷地・御用地と田畑（渡り地・浮地）をそっくり入れ替えることも可能であり、景観的にみた武家屋敷地・御用地の確定が困難な状況であることに変わりはない。これが二つ目の問題である。

歴史的時間のさまざまな位置で設定される「時の断面」は映画フィルムの一つ一つのコマに例えられることがある。多数のコマを連続的に投影すれば時間の流れに沿ったストーリーが展開しているように印象づけられる。しかし、一つ一つのコマの画像は何の動きもない、時間の流れのない静態的なものである。それゆえ、時間と深くかかわる歴史地理学は「時の断面」における静態的研究からの脱却を目指してきた。イギリスの歴史地理学者ダービー（H. C. Darby）のいうクロス・セクション<sup>(35)</sup>、藤岡謙二郎が進めた景観変遷史<sup>(36)</sup>や金田章裕が言う景観史<sup>(37)</sup>がそれにあたる。とくに後者は「時の断面」の時間的な幅をいかに小さく、復原される景観をいかに精緻なものとするかという目的意識のもとで考えられてきたという一面がある。そして、「渡り地浮地絵図」の記載内容も享保8年という一年またはそれ未満という幅のない時間を「時の断面」すなわち歴史的現在としている。しかし、どれほど精緻な景観復原が行われようと、享保8年を映画フィルムのコマのように前後関係のない現在ととらえたまま「渡り地浮地絵図」の記載内容を理解することはできない。

「渡り地浮地絵図」における柳町についてみると、上町口門から上大手門にかけての道筋を境に北側で空白になり、南側で家型記号が描かれている。すでに述べたように、これは一方を城地、他方を村地と理解しているためである。村地は屋敷地にとどまらず、「町惣高書上之写」<sup>(38)</sup>に「御侍家敷土井堀」とあったように、水濠まで村地に含まれている。「新堀」とよばれる水濠がそれに該当すると考えられる。すると、上町口門から上大手門の道筋以南の郭内は、新堀を含めて新たに付け加えられた部分である可能性が出てくる。新堀は寛永12～21（1635～1644）年と推定されている「大野城絵図」<sup>(39)</sup>にも記載されていることから、新堀の築造は享保8年からいけば少なくとも100年近くも前のことになる。しかし、「町惣高書上之写」も「渡り地浮地絵図」も、村地が新たに郭内に組み込まれるという出来事を直接的に記載することはないが、それによって生じた結果を遠い過去のこととして記述しているのではなく、現在のこととして記述しているのである。もちろん、過去の出来事が過去として現在にあるというのではない。遠い過去に起きた出来事、あるいはその結果が現在に及び、現在として記述されているのである。

「歴史的現在」における現在とはきわめて人間的な、体験的な時間のとらえ方であろう。そこに「歴史的」という語が付け加わったことで、知らず知らずのうちに現在を西暦年などに置

き換え可能な歴史的時間の一部として理解していたのではなかろうか。しかし、そのような時間のとらえ方では「渡り地浮地絵図」が記述した享保8年の城下町景観をとらえることができて、それ以上の意味は理解できない。現在という時間を、人間的な、体験的な時間としてとらえなおし、歴史的現在の意味を再検討できれば、時の断面としての歴史的現在も動態的な一面を回復することができるように思われる。

〔注〕

- (1) 渡邊秀一（2001a）「近世大野の火災と城下町の変容—文政期の町屋移転をめぐる—」（高木正朗編『空間と移動の歴史地理』、立命館大学）、pp75–109。渡邊秀一（2001b）「近世大野の町屋移転—比丘尼町の場合—」、佛教大学文学部論集第85号、pp135–149。渡邊秀一（2007）「18世紀初期の越前大野における町人地の再編成」、佛教大学文学部論集第91号、pp85–97。
- (2) 渡邊秀一（20011）「江戸中期の越前大野における浮地と渡り地—「渡り地浮地御絵図」の理解にむけて—」、佛教大学歴史学部論集創刊号、pp33–49。
- (3) 福井県編（1990）『福井県史 資料編16上 絵図・地図—解題・解説—』 pp38–39。
- (4) 「大野町絵図」の図形的記号は蔵家（□）・蔵（罫）・葛家（○）・地名子（△）の4種類が基本で、この他に△やかしやなどの組み合わせにより記号がある。
- (5) 大野市史編さん委員会編（1985）『大野市史第6巻 史料総括編』、大野市役所、pp304–325。
- (6) 宮澤秀和家文書「天和三年亥九月 町惣高書上之写」福井県編（1992）『福井県史 資料編7 中・近世五』福井県、pp432–435。
- (7) 「土井家臣由緒書」（大野市史編さん委員会編（1983）『大野市史 藩政史料編一』。大野市役所所収）。pp875。
- (8) 前掲（1）2001a、pp90–94。
- (9) 大野市歴史民俗資料館寄託斎藤寿々子家文書、宝暦13年「一番上町屋鋪高水帳」
- (10) 滝波与六家文書「午御物成皆済目録」（大野市史編さん委員会編（1984）『大野市史第三巻 諸家文書編二』、大野市、所収） pp523。
- (11) 前掲（7）、pp907。
- (12) 前掲（7）、pp936。
- (13) 前掲（7）、pp904。
- (14) 大野市歴史民俗資料館編（1994）『絵図が語る大野 城 町 村』、pp3。原図は蓬左文庫所蔵。
- (15) 「寛延二年 越前大野城并廓内絵図」（大野市歴史民俗資料館編（1994）『絵図が語る大野 城 町 村』、pp16。）
- (16) 「文化七年 越前国大野城石垣破損之覚絵図」（大野市歴史民俗資料館編（1994）『絵図が語る大野 城 町 村』、pp4。）
- (17) 「貞享五年 越前国大野城破損修復願絵図」（大野市歴史民俗資料館編（1994）『絵図が語る大野 城 町 村』、pp14。）
- (18) 原田伴彦・矢守一彦編（1982）『浅野文庫蔵 諸国当城之図』、新人物往来社、pp95。前田育徳会尊経閣文庫編（2000）『尊経閣文庫蔵諸国居城図』、新人物往来社、pp114。
- (19) 大野市史編さん委員会編（1983）『大野市史 藩政資料編一』、pp1106–1125。
- (20) 享保8年の当該ブロックの居住者は不明である。
- (21) 前掲（2）。
- (22) 「地方御用留」文政10年8月17日条（大野市史編さん委員会編（1984）『大野市史第五巻 藩政史料編二』、大野市、所収） pp217。
- (23) 前掲（6）。
- (24) 前掲（10）。
- (25) 野尻源右衛門家文書「宝暦11年 御領分諸色役割高牒」（大野市史編さん委員会編（1981）『大

- 野市史第三巻 諸家文書編二』、pp688-695。)
- (26) 大野市史編さん委員会編 (1983)『大野市史 藩政資料編一』、pp790-803。
  - (27) 大野市史編さん委員会編 (1981)『大野市史第三巻 諸家文書編二』 pp209。
  - (28) 「地方御用留」(大野市史編さん委員会編1984『大野市史 藩政史料編』、大野市、所収) pp163。
  - (29) 前掲 (28)、pp225。
  - (30) 前掲 (28)、pp184。
  - (31) 前掲 (28)、pp217。
  - (32) 「地方御用留」文政8年2月27日条に「一、一番上町新規浮地相成候場所、去春相改絵図ニ仕立指上候節」とあり、文政7年2月20日条にこれと対応する「本町上之分絵図ニ仕立指上候」という記事がある(大野市史編さん委員会編 (1984)『大野市史第五巻 藩政史料編二』、大野市、pp203、209。)
  - (33) 前掲 (25)、pp691。
  - (34) 「時の断面」とは牧實繁が歴史地理学を規定する際に用いた用語である。小牧實繁(1933)『岩波講座地理学 歴史地理学』、岩波書店、p59を参照。
  - (35) H. C. Darby (1953)「ON THE RELATIONS OF GEOGRAPHY AND HISTORY」、Transactions and Papers (Institute of British Geographers), No. 19, pp I -11。
  - (36) 藤岡謙二郎(1946)「景観変遷史の性格覚書」、日本史研究第1号、pp82-92。
  - (37) 金田章裕(2002)『古代景観史の研究』、吉川弘文館、pp32-42。
  - (38) 前掲 (6)。
  - (39) 「越前大野城図」(大野市歴史民俗資料館編(1994)『絵図が語る大野 城 町 村』、pp13。)

(わたなべ ひでかず 歴史文化学科)

2011年11月15日受理